

## 特集

# 島への定住と起業・Ⅲ



本特集では、これまで一八人のUイターンの方々の定住と起業の背景を紹介してきた。皆さんが島に目を向けた理由や、定住にいたる動機はさまざまだが、今号で紹介する方々を含めて、大きく以下のパターンに分けることができる。

「もともと島で暮らしたいと考えていた方（おもにUターン）」「農漁業など第一次産業を志望しており、島に目が向いた方（おもにUターン）」「地域おこし協力隊制度や起業支援など、国や自治体のメニューの活用を契機とした方（Uイターンともに）」「島の自然や子育て環境、濃密なコミュニティに惹かれた方（同）」などである。

このほか東日本大震災などの災害を経験し、食料やエネルギーなどの供給を他地域に頼る都会の暮らしに疑問や不安を覚え、島への移住を決断したケースも散見される。

移住後の生活も多様化している。例えば、宿とガイド・海女・農業などを組み合わせる、店の空き時間に観光ガイドを行う、カフェなど飲食店を若者支援や交流促進の場として活用するなど、事

業に独自色を出したり、少しでも収入を増やす工夫がなされている。

一つの生業にこだわらず、自分や地域のニーズに応じて複数の仕事に従事したり、Uイターンという立場を生かして島内外の方々の接点をつくりあげようとする皆さんの姿は、各島における移住の促進や交流人口の拡大に向けて、参考になる点多いのではないだろうか。

また、定住の動機、その後の暮らし方を複合的に分析することで、移住希望者の志向や家族構成、ライフステージなどに沿った具体的な行政支援施策の立案や、地域に溶け込むための効果的なサポートの実現にもつながるかもしれない。

今回は、ゲストハウスや写真館の経営、移住支援活動や交流促進施設の運営などで島に定住を果たしたUイターンの方々の移住の背景、現在の生活、今後の展望などを紹介する。さらに、島へ嫁がれた女性も広義の移住者にとらえ、来島当時の様子や、食堂を開業した経緯などについて語っていただいた。

① 島ガイドと旅人宿で交流を創出 ..... 26

(北海道利尻富士町・利尻島)

利尻うみねこゲストハウス代表 / Iターン 西島 徹  
利尻・島ガイドセンター代表

② 17人の島、「島おこし会社」を設立 ..... 32

(香川県三豊市・志々島)

志々島振興合同会社業務執行社員 / Uターン 山地常安

③ 海女の宿——心地よい場所づくりを ..... 38

(長崎県壱岐市・壱岐島)

みなとやゲストハウス / Iターン 大川香菜

④ [レポート] 交流空間と写真館を開業 ..... 42

(長崎県五島市・奈留島)

ライター 竹内 章

⑤ [レポート] 島に嫁ぎ、子育てを終えて食堂を開業 ..... 50

(熊本県上天草市・湯島)

上天草市地域おこし協力隊 / Iターン 荅 和宏



①

③

④

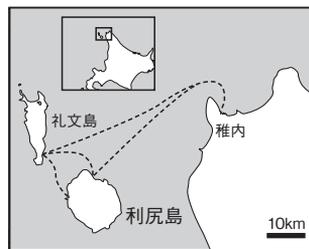
②

⑤



# 島ガイドと旅人宿で交流を創出

利尻うみねこゲストハウス代表 利尻 島ガイドセンター代表 / イターニ 西島 徹



利尻島：礼文島とともに日本の最北に位置する島。面積182.15km、周囲65.1km、人口4,710人（平成29年10月現在）。利尻の名はアイヌ語でリイ（高い山）、シリ（島）から。標高1,721mの利尻山は別名「利尻富士」とも呼ばれる秀峰で、頂上から利尻島全域、礼文島、サハリンがみえる。

## 利尻島移住は縁と運とタイミング

私は福岡県福岡市出身です。子どもの頃から北海道への憧れがありました。小学生の時、父が買ってくれた時刻表の路線図を眺めては日本のてっぺんはどこなところだろうと、思いを馳せていました。また、テレビドラマ『北の国から』にも大きな影響を受けました。主人公の男の子が私と同じくらいの年齢設定ということもあり、画面から流れる自然風景や生活の様子に毎回釘づけでした。

地元の高校、大学を卒業後、就職とともに上京。印刷会社で営業系の仕事に就きましたが、休みのたびに道内各地をめぐるほど北海道好きとなりました。

一九九八年、二九歳の時に利尻富士町地域活性化支援協

議会などが主催した「秋の利尻島観察ツアー」に参加して、はじめて利尻島を訪れました。このツアーは、利尻島の秋の魅力をもっと知ってもらおうと地元の方々が企画したもので、札幌や稚内、東京から一九名が参加しました。内容は、植物やキノコなど自然を観察しながらのトレッキング、海の幸満載のバーベキューなど。生ウニやホッケ、タラバガニの鉄砲汁の朝食に「島の人は毎朝こんないいもの食べてるんですか」と質問して大笑いされたこと、夜遅くまで島の方々と語りあったことを今でも覚えています。

その二年後に退職し、自転車にキャンプ道具を積んで北海道へ向かいました。六月から一〇月まで道内をめぐる中、利尻島には一カ月ほど滞在し、利尻山登山などをして過ごしました。翌年、翌々年は夏の三カ月間ほど利尻島のキャ

ンブ場にテントを張りながら、ホテルなどのアルバイトに通いました。

二〇〇三年の夏も終わりを迎えたある日、「家が借りられたら、冬も島に居ようかな」と半分冗談、半分本気で話したところ、一軒家を借りられることになりました。はじめての雪の中での生活。雪かきや雪道の運転、夏とは違う真っ白な景色、どれも新鮮でした。冬の生活もなんとかなるもんだとわかり、正式に住民票を利尻町へ移したのは二〇〇四年四月のことです。家財道具はバイク一台とキャンプ道具、パソコン一式だけでした。

移住の決め手となったのは親切な島の人たちとの縁です。家を借りたかと思っても不動産屋はなく、人づてで探すことになるなど、人とのつながりがなくては物事が進まないことが島には多々あります。振り返ると、はじめて利尻を訪れた時に多くの島の方々と知り合いになれた幸運が、移住につながったのだと思います。

### 「ネイチャーガイド」の道を志す

利尻島に通ううちに利尻町立博物館の行事に参加するようになり、そこで島の自然を愛する方々と出会いました。その中の一人が、隣の島・礼文島在住の自然写真家でネイチャーガイドの宮本誠一郎さんです。宮本さんは千葉県出身、夫婦で礼文島へ移住。利尻島や礼文島の自然ガイドブ

ックや写真集などを出版するほか、両島で早くからネイチャーガイドをされています。宮本さんの「ガイドの仕事をやってみないか」の一言で、私のネイチャーガイドへの道が始まりました。

利尻島と礼文島を定期的に行き来しながら宮本さんの後をついて歩き、スキルを身につけていきました。はじめは植物の名前など覚えなくてはならない知識や技術の多さ、難しさに圧倒されましたが、それでも徐々に仕事を任せてもらえるようになりました。

現在の主なガイドの仕事は、①旅行会社のツアーの一部に組み込まれたコースの案内、②個人旅行者向けのコースの案内、③島内のホテル宿泊者や利尻島に寄港するクルーズ客船内での島の紹介、などがあげられます。

### 利尻の魅力伝える「島ガイド」へ

利尻島で生活をするようになると、島の魅力は自然だけではないことに気づきました。島ならではの暮らしや歴史、



南浜湿原ガイドの風景。

文化、産業と幅広い分野にわたり、それらを余すことなく伝えたいとの思いでネイチャーガイドから「島ガイド」と名乗るようになりました。

移住後すぐに町営ホテルから宿泊者向けのスライド上映会の依頼を受けました。これは夕食後の午後八時から三分ほど、ホテルのロビーで島の自然や四季の移り変わりなどを紹介するものです。お客様から好評をいただき、一四年経った今でも夏季シーズン中、每晚実施しています。また、利尻島には「にっぽん丸」や「はしふいっくびいなす」など国内外のクルーズ客船が年間一〇回ほど寄港します。この船に乗船し、利尻島を紹介する講演も行っています。

### 島の主婦たちと協力したガイド態勢の確立

二〇〇六年に島で知り合った静岡県出身の女性と結婚。翌年には子どもを授かりました。当時は短いシーズンのガイドだけでは生活できず、新聞社の通信員やキャンプ場の集金、外来植物の駆除作業など、多い時には七つの仕事を掛け持ちしていました。

少しずつガイドの仕事は増えていきましたが、新たな問題も発生。利尻の観光シーズンはゴールデンウィークから一〇月頃までですが、なかでも六〜七月前半がピークとなります。仕事を増やせば増やすほどトップシーズンに集中し、短期間だけ深刻な人手不足に陥りました。その問題解

決として考えたのが、島在住の主婦などに仕事をお願いすることです。幸い旅行会社やホテルのフロント業務の経験者、元バスガイドなど接客の経験がある方々と出会うことができ、一定のトレーニング後、毎年三〜五人の方々に活躍していただいております。

### 旅人が気軽に利用できるゲストハウスを開業

島内にはおよそ三〇軒のホテル・旅館があり、七割が夏の営業です。一泊二食付きで八〇〇〇円から二万五〇〇〇円の価格帯で、観光目的が大部分を占め、バスツアーあるいはトレッキングや登山のために島を訪れている方々が利用します。かつてはユースホステルが三軒あり、多くの若者で賑わっていましたが、二〇一〇年までにすべて閉鎖。低価格で泊まれる宿がない状態でした。

私も妻も旅好きだったこともあり、全国各地にある旅人宿やゲストハウスに泊ってきました。いつかは旅人が集まれる宿をやりたい。それも一泊だけでなく二泊、三泊と滞在してもらえそうな気軽な宿が利尻島には必要だ、という思いがありました。しかし、資金や物件などを考えると夢のまた夢のような話でした。

その夢が大きく動いたのは、二〇一五年の夏、「インターネット不動産業者を介して利尻島（利尻富士町）の旅館が売物件になっている」という友人からの情報でした。すぐ



利尻うみねこゲストハウスの外観。

にオーナーさんを訪ね、高齢のため旅館を手放したいという話をうかがいました。この方とは顔見知りであったため、その後の話はスムーズに進みました。

「利尻うみねこゲストハウス」の開業は、二〇一六年です。これまでの部屋数一三、定員三〇名、一泊二食付き八六四〇円の観光・ビジネス旅館から、素泊り三八〇〇円の相部屋ドミトリ一宿に新しく生まれ変わりました。営業期間は、六〜九月です。直前まで営業していた宿の居抜き物件であったため、開業のための初期投資は最小限で済ませることができました。宿の開業に合わせて、私たち家族も利尻町

から利尻富士町に引越しました。

初年度は家族経営でどこまで運営できるか見当もつかないため、あえて宣伝などをせず、フェイスブックなどで宿の様子をお知らせするだけに留めました。結果、宿泊のお客様はあまり多くありませんでしたが、その分、一人ひとりと接する時間

を長くとることができ、余裕を持った接客ができたと思います。

### 海から頂を目指す宿泊者たち

利尻うみねこゲストハウスが島内のどの宿とも違う点は、利尻山登山客に対して、登山口までの送迎をしないことです。利尻山は年間八〇〇〇人ほどの登山者があり、すべての宿泊施設で早朝、登山口まで片道約五キロメートルを車で送迎しています。しかし、当宿ではあえてこの送迎をしないことに決めました。その代わりに「0 to 0 利尻山」と名づけて、宿の裏にある海岸にタッチしてから頂上を目指してもらっています。海拔〇メートルから一七一九メートルの頂上まで丸ごと歩くことになり、所要時間は通常より二時間、距離で一〇キロメートルほど長くなりますが、達成者は宿の談話室に名前と感想を書き残すことができます。

「これが本当の登山だ！」

「達成感がハッパない！」と感動の言葉が記されています。また、ここに名前を残すためにチャレンジしたいという宿泊者も現れてき

番号	名前	出身	時期	コメント
34	藤原 浩	東京	10/10	初めての登山、達成感満点。
35	さとしん	富山	10/10	久しぶりの登山、楽しかった。
36	ふじ	新潟	10/10	登山初心者ですが、達成感。
37	あやみ	富山	10/10	初めての登山、達成感。
38	加藤 拓未	富山	10/10	初めての登山、達成感。
39	もっさん	富山	10/10	初めての登山、達成感。
40	ピル	富山	10/10	初めての登山、達成感。
41	ピル	富山	10/10	初めての登山、達成感。
42	ピル	富山	10/10	初めての登山、達成感。

「0 to 0 利尻山」達成者名簿。

ました。

談話室「島時間」は、旅や離島などに関する一〇〇〇冊あまりの本を揃え、のんびりとした時間を過ごしたり、宿泊者同士が交流する場となっています。島旅好きのお客様も多いためか、遠く離れた波照間島や小笠原の話で盛り上がることもしばしばあります。また宿泊者が乗船するフェリーが出航する際、私たちと連泊者がうみねこの着ぐるみを着て、宿近くの岸壁から大漁旗を振るお見送りが好評です。島だからこそできる感動の演出だと考えています。

二年目となる今年度は、宿のホームページを立ち上げま



うみねこの着ぐるみを着て、大漁旗を振りながらお見送り。



ゲストハウスの玄関での家族写真。

した。旅人同士のクチコミもあってか、宿泊者が前年の二倍ほどになりました。初年度に宿泊された方々の約二割がリピートしてくれたほか、昨年一泊だった方が三泊、四泊と長く滞在してくれるようになるなど、好評を得ています。

人と人がつながる場を目指して

ガイド業一四年目、ゲストハウス経営二年目を終えて、今後の課題はいずれも人材の確保です。どちらの事業にいてもピーク時期には人手不足となるため、有能な人材を絶えず確保していかなければなりません。まずは、現在一緒に働いているスタッフに長く勤めていただければ、うな環境を整えていきたいと考えています。

利尻島の観光客数は、一四年前と比べて四割減というデータがあります。しかし私は、島はもっと可能性があると確信しています。「自分自身が二度、三度と訪れたくなる場所はどこか？」と、時々立ち止まって問いただしてみます。答えは、北海道の厚岸<sup>あつし</sup>や鹿児島<sup>けいし</sup>島のトカラ列島です。理由は、そこにまた会いたい人がいるから。絶景や食にも代えられない、もっとかけがえのないもの、それが人との出会いであり、私が目指すものです。人と人がつながる場所、島人と旅人との交流の場を創り出していきたいと思っています。

行政からのメッセージ

◎利尻の魅力伝える島ガイド

利尻富士町は、北海道の北端に浮かぶ利尻島にあり、利尻昆布に代表される漁業、日本百名山である利尻山を中心とした豊かな自然景観を活用した観光業が基幹産業の人口約2,600人の町です。

1998年9月26～27日、夏季中心の観光ツアーだけでなく、自然環境との共存を図り利尻の自然を再発見して観光のすそ野を広げようと、「利尻島で小さな秋を見つけませんか」と銘打ったツアーが島に住む若者たちの手によって企画・実施されました。このツアーに東京から参加した友人3人のグループのうちの一人在西島さんです。

当時のアンケートに「実際に利尻で生活しているみなさんと話ができて、いっしょに酒が飲めたことが非常に良かったです。フツの旅行だとこんな出会いはできませんからね。何よりもそれが一番よかったことです」と書いた西島さんは、その後、利尻のファンとなって何度も島を訪れて滞在するようになります。そして2004年の春、とうとう利尻島に移住し、ガイドの仕事に就きました。

その頃の島は、周遊型の団体旅行のお客が多い時であり、ガイドの需要もあまり高くなく、また、あっても夏の間に集中していました。当時の西島さんは、生活のためにいろいろなアルバイトをなさっていたと記憶しています。

こういった状況にありながら、西島さんは日々知識を蓄積。現在では、自然や文化、歴史や暮らしなど、春夏秋冬いろいろな切り口から島の魅力を伝える利

尻の島ガイドとして、旅行者を楽しませています。西島さんの提供するさまざまなプログラムは、「利尻でもう一泊」を目指した滞在型観光を進めていく上で重要な資源であるとともに、その着眼点や企画構成は、島でガイドを目指す方々のお手本になると思います。

2016年からはガイドだけではなく、「利尻うみねこゲストハウス」の経営も手がけ、「バックパッカー・ライダー・チャリダー・のんびり島旅・はじめての一人旅・女子旅にもおすすめ」と、ご自身が旅人だった経験を活かした宿づくりを展開しています。フェイスブックには、いろいろな旅人が紹介され、そのスタイルもさまざまですが「いつでも温かく迎えてくれ、時間がゆっくり流れる宿」として、お客様から喜ばれています。

南は九州・福岡県出身の男が、北の果て利尻島に移住し、裸一貫で築き上げてきた経験は、利尻のみならず、移住を考えている人たちへの指針の一つとなるのではないのでしょうか。

本町は離島という地理的条件から、進学や就職を機に若者の島外への人口流出が続いており、この減少傾向になんとか歯止めをかけようと、漁業や観光業の担い手確保・育成のため、「漁師道」などの研修や支援などに取り組んでいます。道のりは容易ではありませんが、西島さんをはじめ皆で知恵と力を出し合い、町を元気に賑やかにしていきたいと思っています。

(利尻富士町産業振興課 課長 島谷一昭)

西島 徹 (にしじま とおる)

福岡県出身。北海道が好きで道内各地を周り、2004年春に利尻島へ移住。「島ガイド」として自然や歴史など島を丸ごと案内する。妻と小学生の息子との3人暮らし。2016年より宿泊施設「利尻うみねこゲストハウス」を家族経営で開業。